

古代における建築工事の工程と儀式

濱島正士

Process and Rituals in the Architectural Construction in Ancient Japan

- ① 寺院の造営
- ② 平安宮の造営
- ③ 工匠の儀式
- ④ 工期と工程
むすびにかえて

【論文要旨】

日本の建築は木造で軸組構造とするのが特徴で、山から木を伐り出して製材し、所定の部材に加工し（木作り）、同時に基壇を築いて礎石を据え、柱を立て梁・桁を組んで棟を上げ、屋根を葺き、造作を取り付け、壁を塗り色を塗り金具を付けるなどして完成する。

古代においては、こうした建築工事がどのような工程で進められ、完成までどの位の工期が掛かったのか。工事中には、工事の進捗に合わせてどんな建築儀式が行われたのか。なかでも、工匠の儀式である木作始め、柱立て、棟上げはどのような内容であったのか。それらは中世以降と違ったのか、同じだったのか。

以上のような建築生産に係わる問題について、文献史料にもとづき寺院や宮殿の場合を考察する。

古来、日本の建築は木造の軸組構造とするのが常で、木を伐り出して製材し、所定の部材に加工し、あわせて基礎工事を行い、軸組を組み立てて屋根を葺き、造作を取り付け、壁・塗装・金具等の雑工事を行って完成する。この建築工事が古代ではどのような工程で進められ、工期はどの位掛かったのか。また、工程の節目でもある事始・木作始・地鎮・立柱・上棟・落慶供養などは古代でも行われたのか。なかでも、中世以来工匠の儀式として重視されてきた木作始・立柱・上棟はどのような内容であったのか。そうした点について、典籍・記録・文書等の文献史料に現われる大規模寺院や宮殿の造営工事をみることにする。

なお、工期については陰暦では閏月があつて年月数を正確に示すことが難しいため、およその数値を示すにとどめる。

①寺院の造営

1 法興寺と山田寺

飛鳥・奈良時代で建築工事の工程が分かる資料はほとんど無い。蘇我馬子が建てた日本初の本格的寺院法興寺について『日本書紀』は、「崇峻元年（五八八）始めて法興寺を作る、同五年十月大法興寺の仏堂と歩廊を起つ、推古元年（五九三）正月十五日仏の舍利を以て法興寺の刹の柱の礎の中に置く、十六日刹の柱を建つ、同四年十一月法興寺造り竟りぬ」と記している。五八八年に金堂等の工事を始めて約四年後に金堂と回廊が出来、そのあと続いて塔の工事を始め、四年近くかかって伽藍全体が完成したことが分かる。木造始・立柱・上棟等工程の詳細は明らかでないが、塔では仏舎利の納入と心柱立が工程上重要視されたことは明白である。

蘇我氏の一族倉山田石川麻呂が建立した山田寺については、『上宮聖徳法王帝説』裏書に「舒明十三年（六四一）三月十五日浄土寺（山田寺）

を始め、始めて地を平にする、皇極二年（六四三）金堂を立てる、天智二年（六六三）塔を構え、天武二年（六七三）十二月十六日塔の心柱を立て、その柱の礎の中に円穴を作り（中略）舍利八粒を納む、同五年四月八日露盤を上ぐ、同七年十二月四日丈六の仏像を鑄す、同十四年三月廿五□仏眼を点す」とある。敷地の造成工事を始めてから本尊仏像の開眼まで四二年もかかっているが、これは金堂を建てたあと大化五年（六四九）三月廿五日に石川麻呂が天皇勢に追われて自害するという事件が起こり、そのため工事が二十数年も中断したことによる。山田寺でもまず金堂が建てられているが、造成工事を始めて二年後の「金堂を立つ」がどの段階を指しているのかは明らかでない。しかし、さらに五年後の六四八年に「始めて僧が住む」とあるので、その時には金堂のみならず僧坊なども完成していたのであろう。塔は工事再開後に建てられ、心柱を立ててから二年数カ月後に相輪を上げているので、おそらくこの時には雑工事を除いてほぼ組み上がり瓦も葺かれていたと思われる。詳しい工程は分からないものの、心柱立と相輪上げが工程上の重要な節目であったことは間違いない。

つぎに、平安京内外の寺院について、工程や工期が分かる例をみよう（表1参照）。

2 法成寺

藤原道長が自邸京極殿の東隣に建てた中河御堂（無量寿院）については、『左経記』や『小右記』によっておよその工程を知ることが出来る。寛仁三年（一〇一九）七月十六日に丈六阿弥陀像九体を安置する十一間堂の木作が始められ、翌四年正月十四日基壇を築き池を穿ち垣を築いて十五日に礎石が据えられ、十九日には柱立上棟が行われた。二月十五日仏壇が築かれて廿七日に阿弥陀像九体と観音・勢至像が仏壇に安置され、三月廿二日に落慶供養が行われた。『栄華物語』巻第十八にみるような贅を尽くした桁行十一間の阿弥陀堂が着工から八カ月で竣工したのは、

国司一人に一問ずつ受け持たせるという、私寺としてはおそらく例のないやり方で施工したからで、いかに多くの工匠や人夫が動員されたか、工事の有様は『栄華物語』巻第十五によってうかがい知ることが出来る。

次いで金堂・五大堂が建立され、治安元年（一〇二一）六月廿七日立柱、七月十五日上棟^①、一年後の同二年七月十四日に落慶供養された。着工の期日は明らかでないが、無量寿院の竣工に続いて始められたとすれば、二年数カ月の工期を要したことになる。その間にも諸堂の工事が行われていて、十齋堂と三昧堂が寛仁四年四月廿八日に始められ（木作始か）、十齋堂は九カ月後の同年閏十二月廿七日に供養された。さらに、治安元年十二月二日に道長の室倫子が建てた西北院が、同四年六月廿六日には薬師堂が供養された（『扶桑略記』）。釈迦堂と十三間堂は治安四年四月七日に五重塔と共に立柱され、三年四カ月後の万寿四年（一〇二七）八月廿二日に供養、長元三年（一〇三〇）八月廿一日には東北院が供養された（『扶桑略記』）。五重塔は治安四年の立柱後長元二年七月廿三日に心柱立、同三年十月廿九日に供養されており、最初の立柱から六年半で竣工したことになる^③。

法成寺の創建伽藍は天喜六年（一〇五八）二月廿三日に焼失したが、直ちに再建が図られて三月廿七日には諸堂の基壇が築き始められた。阿弥陀堂は六月十五日に木作始が行われ、十月廿七日に薬師堂・五大堂と共に上棟立柱があり、翌康平二年十月十二日に五大堂と一緒に供養された。壇を築いてから約一年四カ月である。治暦元年（一〇六五）十月十八日には金堂・薬師堂・観音堂が供養された（『扶桑略記』）が、薬師堂は七年前に立柱上棟されており、何故に供養が遅れたのかは明らかでない。承暦三年（一〇七九）十月五日になって東西三重塔・講堂・十齋堂・法華堂が供養されたが、東塔については四年前の承和二年（一〇七五）八月十四日心柱立の記録がある。

東西両塔は永久五年（一一一七）一月八日南大門・惣社と一緒に焼失

したが、四棟は直ちに再建が図られて一月廿日に事始が行われ、南大門は早くも同月廿四日に立柱上棟されて十一月廿八日に造り終り、惣社は七月二日に棟上があり同月廿日に遷宮が行われた。東西両塔は南大門立柱上棟の日に基壇の修理が始まり、翌元永元年（一一一八）十月二日に心柱が立てられ、同二年八月十六日二本目の心柱が立てられた。落慶供養が行われたのは十数年後の天承二年（一一三二）二月廿八日のことである。このように長く掛かったのは、造営行事の藤原為隆が七八分通り出来たところで亡くなったため、工事が中断したのである。また、焼けた塔とは違って今回は五重塔であるから、三重塔よりは工期が長くなるのも当然である。なお、塔では焼けた前身塔の基壇を修理して再利用したのであろうか。南大門は事始から立柱上棟まで四日しかなく短すぎるが、竣工までは十カ月掛かっているので、全体の工期としては八脚門ならば十分であろう。惣社は事始から棟上まで五カ月余り、あと遷宮まで十八日で、やや短いものの全体の工期としては竣工可能と思われる。ただし、南大門と惣社では棟上の意味・内容が違って、南大門は棟まで組み上げたのではなく形式的なものであり、惣社の方は屋根も葺き終って竣工に近いところまで進んでいたのではないかと思われる。

3 六勝寺

白河天皇の御願寺として洛東白河の地に建立された法勝寺^④では、承保二年（一〇七五）六月十三日に事始があり七月十一日木作始が行われて十九日に基壇が築き始められ、八月十三日に立柱上棟が行われた。同四年八月廿七日金堂・講堂に仏像が安置され、十二月十八日には金堂・講堂・阿弥陀堂・五大堂・法華堂・南大門・大門・廻廊・鐘楼・経蔵・僧坊等が供養された。木作始以来約二年半でこれだけの伽藍が整ったのである。このうち、阿弥陀堂は金堂等に約一年遅れて承保三年六月十三日木作始、廿八日に築壇・居礎、七月十一日に立柱・上梁棟が行われている。また、南大門并東西築地は阿弥陀堂に続いて承保三年七月廿三日に

表1 平安京内外の寺院の造営

名称	事項	年月日	出典	備考
法成寺 無量寺院	始木作 御堂築壇穿池築垣 御堂礎 卯二剋中河御堂柱、以午二剋上棟 築御堂仏壇 以午剋被奉渡御仏(中略)未剋奉居仏壇 供養 被始十齋堂并三昧堂等事、十齋堂申剋、三昧堂子剋 無量寿院十齋堂被供養 卯剋立無量寿院金堂柱 無量寿院金堂棟上 金堂五大堂新仏開眼供養 法成寺内被立塔文六堂(釈迦堂)十齋堂三字柱事 法成寺内釈迦堂十三間堂供養 立柱 法成寺塔心柱立事 供養 法成寺焼亡 始築法成寺壇、諸堂皆始之 法成寺上棟立柱、巳剋阿弥陀堂薬師堂、未剋五大堂 阿弥陀堂五大堂并真言供養 東塔心柱立 三重塔 五重塔 南大門、惣社	寛仁三(一〇一九) 七・一六 寛仁四(一〇二〇) 一・一四 " 一・一五 " 一・一九 " 二・一五 " 二・二七 " 三・二二 寛仁四(一〇二〇) 閏二・二七 治安元(一〇二二) 六・二七 " 七・一五 治安二(一〇二二) 七・一四 治安四(一〇二四) 四・七 万寿四(一〇二七) 八・二二 治安四(一〇二四) 四・七 長元二(一〇二九) 七・二三 長元三(一〇三〇) 一〇・二九 天喜六(一〇五八) 二・二三 " 三・二七 " 一〇・二七 康平二(一〇五九) 一〇・一二 承保二(一〇七五) 八・一四 承暦三(一〇七九) 一〇・五 永久五(一一一七) 一・八 " 一・二〇 " 一・二四 " 七・二 " 七・二〇 " 一一・二八 元永元(一一一八) 一〇・二 元永二(一一一九) 八・一六 天承二(一一三三) 二・二八	小右記 左経記 " " " " " " 無量寿院供養記 左経記 " " " " " " 法成寺金堂供養記 小右記目録 扶桑略記 小右記目録 " 日本紀略 扶桑略記 定家朝臣記 " 扶桑略記 為房卿記 扶桑略記 殿暦 " 中右記 " "	木作始か 金堂五大堂堅柱上棟(金堂供養記) 十齋堂は十三間堂の誤か 末心柱か 八月十二日定
法勝寺 金堂他	被始行白河御願事 白河御願寺木作始	承保二(一〇七五) 六・一三 " 七・一一	法勝寺金堂造営記 "	

<p>最勝寺 塔</p> <p>金堂、薬師堂</p>	<p>白河新御塔供養 新御願木作始 白河当時新御願寺礎居 最勝寺地鎮 白河当代新御願棟上 新御願寺金堂薬師堂仏壇被築 白河新御願寺供養、名号最勝寺</p>	<p>永久五（一一一七） 一〇・一九 永久六（一一一八） 二・二一 元永元（一一一八） 六・二〇 " 六・二三 " 七・二三 " 一〇・二六 " 一二・二七</p>	<p>殿曆 中右記 " 覺禪鈔 中右記 中右記部類</p>	
<p>尊勝寺</p> <p>阿弥陀堂他</p>	<p>御願寺始築壇 白河御願寺棟上 白河御願御仏被奉渡金堂講堂 供養（金堂、講堂、阿弥陀堂、五大堂、法華堂、南大門他） 始木作 築壇、居礎 豎柱上梁棟 始木作 居礎 立柱上棟 御塔壇始築 法勝寺塔壇築始 被居御塔礎 被立法勝寺御塔心柱 供養法勝寺之九重塔并薬師堂八角堂</p>	<p>康和二（一一〇〇） 七・二五 " 八・八 康和三（一一〇一） 六・一三 " 八・一三 " 九・一 " 一〇・一三 康和四（一一〇二） 六・二九 " 七・二一 " 七・二五 康和五（一一〇三） 八・二 長治元（一一〇四） 七・八 長治二（一一〇五） 一〇・二六 " 一二・一九</p>	<p>為房卿記 中右記目録 元亨三年具注曆裏書 中右記目録 中右記 殿曆 中右記 中右記目録 陰陽博士安部孝重勘進記 中右記 " 中右記</p>	<p>三月廿七日勘 二年十一月廿四日勘 八月廿五日定 五年十二月廿六日勘</p>
<p>阿弥陀堂</p> <p>南大門他</p> <p>九重塔</p>	<p>御願寺始築壇 白河御願寺棟上 白河御願御仏被奉渡金堂講堂 供養（金堂、講堂、阿弥陀堂、五大堂、法華堂、南大門他） 始木作 築壇、居礎 豎柱上梁棟 始木作 居礎 立柱上棟 御塔壇始築 法勝寺塔壇築始 被居御塔礎 被立法勝寺御塔心柱 供養法勝寺之九重塔并薬師堂八角堂</p>	<p>承保四（一〇七七） 八・一三 承曆元（一〇七七） 八・二七 承保三（一〇七六） 一二・一八 " 六・一三 " 六・二八 " 七・一 " 七・二三 " 八・一五 " 八・三〇 承保四（一〇七七） 八・二五 永保元（一〇八一） 八・二五 " 九・二七 " 一〇・二七 永保三（一〇八三） 一〇・一</p>	<p>扶桑略記 " 扶桑略記 " 扶桑略記 法勝寺阿弥陀堂造立日時記定 " 承曆元年法勝寺供養記 水左記 " 扶桑略記</p>	<p>立柱上棟（扶桑略記） 五月廿八日擇申 居礎豎心柱（扶桑略記）</p>

6

法金剛院 三重塔、経蔵回廊	最勝光院御堂	多武峯寺常行三昧堂	延暦寺横川中堂	醍醐寺薬師堂	仁和寺北院	南大門 同 五重塔
立柱上棟 供養	新御堂棟上 定名字最勝光院 新御堂供養	上板棟 斧始 棟上 仮葺 檜皮葺 作内陣高欄 塗仏壇後壁彩色	事始 仮棟上 正上棟 奉渡本尊	斧始 仏修理始 上棟 仏奉渡 供養	北院為改造破始并銚始 経蔵并廊之棟上 経蔵造了、供養	春日御塔仏始之 中心柱令統立 壇築始并礎居木作始 棟上 令統立心末柱 仏奉渡、鎮壇仏開眼供 供養
長承三(一一三四) 八・一三 保延二(一一三六) 一〇・一五	承安二(一一七二) 二・三 承安三(一一七三) 一〇・一五 " 一〇・二一	承安五(一一七五) 四・一三 安元二(一一七六) 一〇・二六 " 一二・二 治承元(一一七七) 六・ 治承四(一一八〇) 四・ 建久元(一一九〇) 五・ 建久二(一一九二) 七・	仁安四(一一六九) 二・二二 " 二・二七 " 三・一三 嘉応元(一一六九) 一〇・一二	保安二(一一二二) 二・八 " 二・一五 " 四・二七 " 一〇・一八 保安五(一一二四) 四・二	天永四(一一一三) 四・一四 " 七・一〇 永久二(一一一四) 七・九	永久元(一一一三) 七・二六 永久二(一一一四) 三・四 " 七・三 " 七・一八 " 七・二九 永久四(一一一六) 三・三 " 三・六 殿曆
長秋記 中右記	玉葉 " "	多武峯略記 " " " " " "	山門堂舎記 " " "	醍醐雜事記 " " " "	三僧記類聚 " "	中右記 " " " " " "
						二月十二日定

木作始、八月十五日居礎、同月三十日に立柱上棟が行われた。いずれも木作始から約一カ月で立柱上棟されている。

法勝寺の中で最も注目すべき八角九重塔は前記の諸堂舎が出来上がって暫くしてから着工されたもので、承暦五年（一〇八一）八月廿五日基壇が築き始められ、九月廿七日に礎石を据えて心柱が立てられ、二年後の永保三年十月一日薬師堂・八角堂と共に供養された。これで見ると、基壇を築き始めてから二年余りで竣工したことになるが、木作始の記事は見当たらず、実際の工期がどうか、明らかでない。総高さ二七〇尺に及ぶ平面八角形の九重塔という類例の稀な塔にしては工期が短すぎるようにも思われる。「承暦元年法勝寺供養記」の中に「同年八月廿五日法勝寺御塔壇始築之」とあって、「水左記」の承暦五年八月廿三日法勝寺塔壇築始と重複するものの、あるいはこの時から造成工事が始まっていたのかもしれない。池の中島に建てた塔であるから、軟弱な地盤か何かの理由で敷地の整備に時間が掛かったことも考えられよう。そうだとすれば、承暦五年八月廿五日の壇築始以前の早い時期に木作始が行われたのかもしれない。

堀川天皇御願の尊勝寺の建立は、康和二年（一一〇〇）七月廿五日日法勝寺の西に隣接する仏所屋で仏像が造り始められて着手された。その仏所仮屋は金堂・講堂・薬師堂・五大堂のそれぞれの仏像製作に各一棟ずつあった（『元亨四年具注曆裏書』）。八月八日木作始が行われ、翌三年六月十三日諸堂の礎石が据えられて御堂並びに南大門諸門等の壇が築き始められ、鎮壇が行われた。木作始から丁度一年後の八月十三日に棟上があり、九月一日には立破風葺瓦が行われた。翌四年六月廿九日仏像が諸堂に安置され、夜に入って寺名が尊勝寺と定められて、七月廿一日には供養が行われた。この時竣工した建物は金堂・講堂・廻廊・中門・鐘楼・薬師堂・観音堂・五大堂・灌頂堂・曼荼羅堂・東西両五重塔・南大門であった（『中右記』）。木作始から二年弱、棟上から一年弱である。両

塔については、康和三年三月廿八日に金物が諸国へ割り当てられ（『殿曆』）、十月十三日は心柱が立てられた。なお、『中右記目録』に「康和三年十月十三日新御願諸堂壇築始」とあるが、これは同年六月十三日に壇を築き始めた金堂・南大門諸門以外の建物のことであろうか。

金堂・東西両五重塔などが供養されたあと、阿弥陀堂・准胝堂・法華堂が建立され長治二年（一一〇五）十二月十九日に供養された。着工の時期は明らかでないが、棟上から供養まで阿弥陀堂が一年四カ月であるのに対し、法華堂は五カ月余りしかなく、少々短すぎる。

鳥羽天皇の御願になる最勝寺は尊勝寺の東辺にまず塔が建てられ、永久五年（一一一七）十月十九日に供養された。翌永久六年（元永元年）二月廿一日に金堂その他堂舎の木作始が行われ、六月廿日礎居、同月廿二日に地鎮が行われた。七月廿三日には棟上があり、十月廿六日金堂と薬師堂の仏壇が築かれ、十二月十七日に供養が行われ最勝寺と名付けられた。この時にどれだけの建物が竣工したのか明らかでないが、木作始から十カ月という早さである。塔の工事中に準備が相当進められていたのであろうか。

鳥羽天皇の中宮待賢門院御願の円勝寺では、最勝寺に倣ったものか先に塔が三基建てられ、東御塔（三重塔）が大治元年（一一二六）三月七日、中御塔（五重塔）が翌二年一月十二日、西御塔（三重塔）が同年三月十九日にそれぞれ供養された。『中右記目録』に「天治二年（一一二五）十月廿七日白河御塔心柱立女院御願」とあるのは中御塔のことであろうか。だとすれば、心柱立から供養まで一年三カ月弱となり、五重塔の工程としては妥当と思われる。三塔とも着工の期日は不明である。『中右記目録』には「天治二年八月三日白河御願寺木作始、大治元年十一月十三日白河御願寺棟上伊予守基」とあり、これが金堂その他の堂舎を指すものと考えられる。塔の木作始は工期から考えると、金堂等より先に行われたとみてよい。大治三年三月十三日に金堂等の供養が行われたが、

これは木作始から約二年七カ月経っている。「円勝寺供養祝願」(『本朝統文粹』)によると、三塔のほかに大日五仏像を祀る金堂、その左右に五大明王を祀る五間堂と九間堂があったらしいが、伽藍の詳細は分からない。崇徳天皇御願の成勝寺は保延五年(一一三九)十月廿六日に供養されている(『百練抄』)が、工程については記録が見当たらず明らかでない。『中右記』に「保延三年正月八日主上白川三依可定御願寺」とあるのが造立定であろうか。

近衛天皇の御願により建立された延勝寺の工事については、『本朝世紀』によってかなり詳しく工程を知ることが出来る。久安二年(一一四六)八月一日に着工等の日時が定められ、木作始同月七日、築垣(壇)十月四日、居礎同月廿八日とされた。木作始は予定どおり行われたが、その後は十月十三日に壇が築き始められていて、同月四日と廿八日には工事に関する記載がない。翌三年四月廿日仏像を造るための仏所仮屋が立てられた。尊勝寺では真先に仏像が造り始められたのに比べるとかなり遅い。六月十八日各建物の日時が勘され、金堂并諸堂御塔礎七月九日と十六日、鐘樓并経蔵木作当日・築壇七月三日・居礎同月九日と十六日、諸門木作当日・築壇七月三日・居礎九日と十六日・立門(立柱か)同月廿日とされた。したがって、この時点で居礎は最初の予定より約九カ月遅れたことになる。さらに、七月中にそれらが実施された記載はなく、八月廿八日になって再度居礎当日、堅柱上棟十月十日と定められている。トして吉日を選ぶ陰陽寮の予定どおりには工事が進捗しなかったのである。十月十日に予定どおり立柱上棟が行われ、十一月廿二日には大門の上棟が翌廿三日と定められた。十日の立柱上棟は当然金堂并諸堂御塔であったのだろう。四年六月十六日には破風が立てられて瓦が葺き始められ、五年三月八日に供養が同月廿日と定められて予定どおり供養が行われた。木作始以来二年七カ月余りである。その期間中木作始から居礎まで一年余りかかっており、基壇築造と木作にかなり時間を要している。

る。

4 その他京内の寺院

白河上皇の院御所白川泉殿内に建立された新阿弥陀堂(蓮華蔵院)は永久二年(一一一四)三月廿九日に基壇が築き始められ、四カ月後の八月二日に立柱上棟が行われ、十月廿九日供養の日を十一月廿九日と定め、十一月十九日に仏像が安置されて十日後に予定どおり供養が行われた。木作始がいつ行われたのか分からないが、基壇が築かれてから八カ月の早さである。供養の様子は「永久二年白川御堂供養記」に詳しく述べられている。このあと、三重塔が建立されて永久五年三月十二日に供養が行われたが、着工等の期日は明らかでない。

その後、白河新阿弥陀堂の傍にまた九体阿弥陀堂と三重塔が建立されることになり、大治四年(一一二九)八月三日木作始が行われ、翌五年二月廿九日に堂と塔の棟上が行われた。六月廿四日には塔、七月二日には阿弥陀堂が供養された。木作始から約十一カ月である。同じ日に木作始・棟上が行われた阿弥陀堂と塔が、何故供養だけ数日をおいて別の日に行われたのかは分からない。三重塔が十一カ月で竣工というのは、いささか早過ぎるように思われる。

鳥羽天皇が鳥羽殿に建立した勝光明院については、『長秋記』に工事の過程が述べられている。長承三年(一一三四)四月十九日に居礎と立柱上棟が行われたが、居礎と立柱上棟が同じ日に行われるのはあまり例がない。このことについては「礎日先棟上之由、可令勘也、然而上棟日、至七月無之、仍同日令勘之」とあって、上棟の吉日が七月に至るまで無いということで行うこととなったらしい。着工については「去年事始」とあるだけで期日は不明である。六月になって堂が水難に遭うおそれがあるとして位置を替えることも検討されたが、結局そのままになった。翌保延元年六月、天皇が二階が高過ぎると苦言を呈したことで柱を七寸切り縮めることとなった。六月十九日供養を十月と定めたが、

八月になって、九月に伊勢の遷宮があるため翌年に延期された。保延二年三月六日に仏像を安置して鎮壇が行われ、同月廿三日に供養された。居礎から一年一ヵ月であるが、居礎以前木作始からの期間は分からない。⁽⁶⁾仁和寺北院の経蔵は、改造のために天永四年四月十四日破壊を始め同時に新始(木作始)を行った。七月十日経蔵并廊の棟上があり、翌永久二年七月九日に造り終って供養された。新始から一年四ヵ月が経過している。

5 京外の寺院

春日社では五重塔が二基相次いで建てられたが、その一つ西塔は摂政藤原忠実によるもので、天永三年(一一一二)七月廿八日に木作始・壇築始・礎居始の三事を八月七日に行うことが定められ、当日同じ時刻に三事が行われた。『中右記』には日時決定の事情や儀式の様子が詳述されている。翌天永四年(一一一三)七月十日に心柱が立てられ、同二年三月四日中心柱、七月廿九日に末心柱が立てられた。末心柱を立てる前日には四重を皆作り終り五重を作り始めていた。心柱が三本継ぎで、塔身の組上げに合わせて心柱も継ぎ立てられていったことが分かる。塔の工事が進むのに併行して南大門の工事が始められ、同年七月三日に木作始・壇築始・礎居、同月十八日に棟上が行われた。永久四年三月三日塔に仏像が安置され、仏舍利・經典が奉籠され、同月六日供養された。南大門については言及していないが、同時に供養されたのであろう。塔は木作始から数えて一年後に心柱を立て、二年後に三本目の心柱を継ぎ立て、三年七ヵ月後に竣工したことになる。南大門の方は木作始から一年八ヵ月後の竣工である。

醍醐寺の山上に延喜七年(九〇七)五大堂と共に創建された薬師堂は歳月を経て「此堂朽損了、只礎許所残也」となり、保安年間に再建されることとなった。再建は『醍醐雜事記』によると、保安二年(一一二二)二月八日に斧始があり、同月十五日仏像の修理始、四月廿七日に上棟さ

れ、十月十八日には仏像が安置された。斧始から八ヵ月が経っており、竣工直前と思われるが、供養されたのは約二年半後の保安五年(一一二四)四月二日である。他の堂舎の竣工を待って供養が行われたのであろうか。

比叡山延暦寺の横川中堂は『山門堂舎記』によると、仁安四年(一一六九)二月五日に焼亡したあと直ちに再建が図られて、同月廿二日に事始(木作始であろう)が行われ、同月廿七日に仮棟を上げ、三月十三日に正上棟が行われた。十月十二日には本尊が安置され、根本中堂の灯火が移された。事始以来八ヵ月弱で竣工したことになる。仮棟上は形式的な立柱棟上で、正上棟が工程上の棟上なのであろう。この堂は七間堂で正面に孫庇があつて四面懸造というから、相当数の材木が必要であつたらしく、材木集めのことがかなり詳しく記されている。一山挙げての造営で、屋根が檜皮葺とはいふものの、不便な山中ではあり、八ヵ月弱の工期で竣工にこぎつけるのは容易ではなかったと思われる。

多武峯寺における常行三昧堂について『多武峯略記』をみると、承安年間焼失後同五年(一一七五)四月十三日に仮棟を上げてから翌安元二年十月廿六日に斧始があり、十二月二日に棟上が行われた。最初の上仮棟が何を指すのかは明らかにしない。斧始から約八ヵ月後の治承元年(一一七七)六月に仮葺され、同四年四月に檜皮が葺かれた。これは仮葺をして堂がほぼ形を成した段階で、三年近く工事が中断したものと思われる。さらに、檜皮葺がされた時点でもまだ内部は完成しなかったものであろうか、一三年後の建久元年(一一九〇)五月になって内陣の高欄が作られ、翌二年七月に仏壇後壁の彩色が塗られている。おそらく、財政上の理由により、屋根の仮葺をして何とか使える段階でしばらくおかれ、本葺後は内部の雑作が終らないまま相当長く使われたのであろう。延暦寺や醍醐寺ほどの大寺院ではないため、造営に苦勞したものと思われる。

② 平安宮の造営

平安宮の大極殿や内裏の造営工事について、ある程度工程・工期の分かる記録を拾い出したのが表2である。これによって、まず大極殿の造営をみよう。

1 大極殿

新京の造営は延暦十二年（七九三）には工事が始められていたらしいが、大極殿がいつ着工されたのかは明らかでない。翌十三年十月廿日に桓武天皇が新京へ遷御したあとも、十四年正月には未だ成らなかつたが同年中に完成したらしく、十五年の正月には天皇は大極殿で朝賀を受けている（『日本紀略』）。

この第一次大極殿は約八〇年後の貞観十八年（八七六）四月十日夜に小安殿・蒼竜白虎両楼・延休堂及北門・北東西三面廊百余間と共に焼失した。直ちに再建が図られ、同月廿八日には大工権大允ほか木工達が材木を採りに紀伊国へ向かった。六月九日に修造大極殿之事を始めて行い（事始か）、七月十九日大極殿作事を始めるために八省院含章堂で五僧による経の転読があり、廿一日には始めて大極殿を作り土木工夫並べて事に従うとあるから、基壇工事を始めたのである。十一月九日には近江国から大極殿材木九千八百余村（株か）を採り進んだと云ってきた。同十九年（元慶元年）になって四月九日吉日良辰をもって始めて大極殿が構え造られ、伊勢神宮ほか諸社へ奉幣が行われ、八官省で行事大夫以下大少工に及ぶまで饗された。これがおそらく木作始にあたるのだろう。翌元慶二年（八七八）四月廿五日には始めて柱が立てられ（立柱）、それから約一年半後の同三年十月八日に大極殿は成った。右大臣が朝堂院含章堂で宴を設け、作事に預った四位已下雑工已上及飛驒工等が饗され、詩が賦されて音楽が挙げられ、禄が給された。材木を採り始めてから約

三年半を要したことになる。

第二次大極殿は約一八〇年後の天喜六年（康平元年・一〇五八）二月廿六日に新造内裏・中和院・東西廊・朝集堂等と共に焼失した。大極殿の再建はかなり遅れ、一〇年後の治暦四年（一〇六八）五月十一日になって天皇即位事と合わせて大極殿を造ることが定められ、八月二日に事始、十四日に木作始が行われた。事始はおそらく行事所始などの役所的な儀式であろうと思われる。十月二日には早くも上棟の日時が定められ、十日に堅柱・上棟が行われた。この堅柱上棟の内容に関しては『師記』にやや詳しい記事がある。翌延久元年（一〇六九）四月十四日始めて瓦が葺かれ、一年以上経って同二年五月五日に鴟尾は本（木の誤りか）を用う可しの宣下があつたが、これは第二次大極殿の鴟尾が天喜五年四月十四日地に墮ち破損した（『扶桑略記』）ことがあつたため、瓦ではなく木造（銅板張りか）にしたものであろうか。堅柱上棟から約三年半後の延久四年三月廿三日に高御座が渡し立てられ、四月三日には大極殿并蒼竜白虎両楼諸門等に題額が打たれて完成した。十五日には天皇の行幸があつて宴会が行われ、王公以下文人以上が詩を献じ歌舞が奏せられて、それぞれ禄を賜った。これは落慶の儀式に相当するものと思われるが、第二次の時のような工匠達に関する記載はない。

この第三次大極殿は一〇五年後の安元三年（一一七七）四月廿八日に八省・小安殿・蒼竜白虎楼・応天会昌朱雀各門・大学寮・神祇官八神殿・真言院・民部省・式部省・南門・大膳職・勸学院等が地を払って焼亡した。その後の再建については、同年八月廿三日に造大極殿事が定められ（『百練抄』）、十月八日には事始が行われた（『玉葉』）が、結局完成には至らなかった。

以上の二度の大極殿工事を比べてみると、第二次造営では材木を採り始めてから木作始まで一年を要し、そのあと立柱まで一年、さらに落慶まで一年五カ月で、木作始から落慶までは二年六カ月、準備期間を入れ

表2 平安宮の造営

[illegible]

第 9 次	第 8 次	第 7 次	第 6 次	第 5 次	第 4 次
<p>勸造内裏日時 於修理職有造宮事始 造宮事始 奉幣諸社祈申造宮事始 内裏立柱上棟 天皇自左大臣枇杷第入御於新造内裏 内裏焼亡</p>	<p>定造宮使事 内裏木作始、有大碁 始造宮 内裏殿舎堅柱上棟 初造内裏 奉幣諸社依造宮了也 請僧百口於紫宸殿御読経依可有遷宮也 額始 火起登華殿殿舎多皆以為灰燼</p>	<p>定造宮使事 内裏木作始 内裏上棟 天皇自一乘院遷御新造内裏 宮中火殿上皆焼亡</p>	<p>造内裏事始 大碁、依内裏作事也 新内裏木作始 内裏殿舎堅柱上棟 内裏造作所等給饗 天皇自一条院遷御新造内裏、殿舎門懸額 内裏焼亡</p>	<p>八省院東廊有大碁依可有造宮也 内裏殿舎堅柱上棟 天皇讓位於皇太子、自閑院第移御堀河院受禪、即日入内裏 内裏焼亡</p>	<p>造宮事始 始立内裏柱 天皇遷御新造内裏 内裏焼亡</p>
<p>長和四 (二〇一五) " " " " " " 一一・二〇 一一・二七</p>	<p>寛弘三 (二〇〇六) " " " " " " 長和三 (二〇一四) " " " " " " 一一・二六 一一・二九</p>	<p>長保四 (二〇〇二) " " " " " " 長保五 (二〇〇三) " " " " " " 寛弘二 (二〇〇五) " " " " " " 一一・一五 一一・一八</p>	<p>長保二 (二〇〇〇) " " " " " " 長保三 (二〇〇二) " " " " " " 一一・一九 一一・二一</p>	<p>天元六 (九八三) 永観元 (九八三) 永観二 (九八四) 長保元 (九九九) 六・一四</p>	<p>天元四 (九八二) " " " " " " 天元五 (九八二) " " " " " " 一一・二七 一一・二八</p>
<p>扶桑略記 日本紀略 " " " " " "</p>	<p>権記 日本紀略 " " " " " "</p>	<p>百練抄 " " " " " " 日本紀略 " " " " " "</p>	<p>" " " " " "</p>	<p>" " " " " "</p>	<p>" " " " " "</p>
<p>木作始か</p>		<p>五月廿日日程変更</p>			

		事	項	年	月	日	出	典	備	考
第 10 次	造宮行事所始 改定造宮事（上棟立柱明年二月廿一日、葺薨七月七日、遷宮十一月十日） 始造宮檜皮 造宮檜皮始葺 造宮延期定 天皇與太后同與遷幸新造內裏 內裏燒亡	長和五（二〇一六） 寬仁元（二〇一七） " " " " 寬仁二（二〇一八） 長曆三（二〇三九）	四・七 九・二一 七・七 九・七 一〇・一六 四・二八 六・二七	" 左經記 小右記 日本紀略 百練抄						
第 11 次	內裏造作初日 立柱上棟 自上東門院遷幸新造內裏 內裏燒亡	長曆四（二〇四〇） 長久二（二〇四一） " " 長久三（二〇四二） 永承元（二〇四六） 永承三（二〇四八）	一〇・一二 一二・一一 一二・一九 一二・一八 一〇・一八 一一・二	春記脱漏 百練抄 " " " "						
第 12 次	自二条第遷幸新造內裏 內裏燒亡	天喜二（二〇五四） 天喜六（二〇五八）	四・一一 二・二六	山槐記 百練抄						
第 13 次	立柱 新造內裏并中和院大極殿東西樓朝集堂等燒亡	治曆五（二〇六九） 延久二（二〇七〇） 延久三（二〇七一） " " 永保二（二〇八二）	二・一〇 三・一一 三・五 八・二八 七・二九	百練抄 團太曆 扶桑略記 " " 百練抄						
第 14 次	依当梁年今年不可作內裏之由被定之事始 內裡堅柱上棟 入幸新造內裏 內裏及中院燒亡	寬治八（二〇九四） 承徳元（二〇九七） 承徳二（二〇九八） " " " " 康和元（二〇九九） 康和二（二一〇〇） 保元二（二一五七） " " " "	八・一七 一〇・三〇 一二・二〇 一・二四 四・一〇 一〇・三〇 四・一九 六・一九 二・一八 三・二六 一〇・八	中右記 中右記 本朝世紀 中右記 兵範記 " " " "						
第 15 次	有造宮事始 有新造內裏棟上 勘申遷御日時 始作事日来依女御之懷妊事暫被止之 遷御新造內裏									一月二日勘 明年二月二七日
第 16 次	造宮始 內裏棟上 天皇遷幸新造大内									

ると全体で三年半かかったことになる。とくに、材木を集めるのに時間が掛かっている。工事の範囲については明らかにする記載がないが、小安殿・蒼竜白虎両楼・延休堂・北門・北東西の三面廊が同時に焼失しているの、これらの建物も一緒に造営されたのであろう。一方、第三次造営では木作始から立柱上棟まで二ヵ月、それから落慶まで三年六ヵ月、合わせて三年八ヵ月を要している。第二次に比べると全体ではあまり違わない工期であるが、木作始から立柱上棟までがあまりにも短く、そのあと落慶までが長い。第三次における立柱上棟は形式的な儀式で、実際の上棟はもっと後であったのではなからうか。工事の範囲については、大極殿并蒼竜白虎両楼諸門等に題額を打つとあるから、少なくともそれらの建物は同時に再建されたことが分かる。

2 内裏

第一次の造営については記録がないが、天皇が新京に移った延暦十二年十月廿二日には主要な建物は完成していたとみてよからう。この内裏は一六七年後の天徳四年（九六〇）九月廿三日に焼失したが、内裏焼亡は遷都後始めてという（『扶桑略記』）。直ちに同月廿八日造営が定められ、紫宸殿・仁寿殿・承明門は修理職、常寧殿・清涼殿は木工寮、承香殿・淑景舎北一字は美濃国、貞観殿は周防国というように、以下各建物ごとに担当の役所や国が割り当てられ、来年を以て造り終ることとなった（『扶桑略記』）。十月七日には大納言在衡已下が始めて造行事所に著き（行事所始か）、十一月廿八日に木作始が行われた。この時はまず建礼門で大祓があり、次いで内裏造作事が柏原（桓武）・後山階（醍醐）両山陵に告げられた。翌応和元年（九六一）二月十六日堅柱上梁が行われ、五月十四日にはやばやと殿舎門等の額が書かれ、十一月廿日には天皇が新造内裏に遷幸した。木作始から丁度一年である。遷幸に先立ち九月十九日新造内裏綾綺殿において仁王経等の転読が行われている（『日本紀略』）ので、順次各建物が出来ていたのであろう。

この第二次内裏は一五年後に焼亡してすぐさま再建が図られ、やはり事始（木作始であろう）から一年後に完成している。その後も内裏は度々焼亡・再建を繰り返してきて、完成後一年前後で焼失した例が表2に拾い上げただけでも三度あり、さらに第九次造営では長和四年（一〇一五）九月廿日に天皇が新造内裏に遷御して二ヵ月後の同年十一月十七日に焼亡している。

このように、大極殿に比べると火災の回数がきわめて多いが、これは大極殿が儀式・行事のために限られた日しか使われないのに対して、内裏は生活のための建物で日常火が使われていること、大極殿は屋根が瓦葺で棟数が少なく敷地に余裕をもって建てられているのに対し、内裏は檜皮葺の建物が数多く密集して建てられていること、などによる。

工期については一年前後の場合が多いが、第四次造営では天元四年（九八一）二月廿日に事始があつて七月八日に立柱、同年十月廿七日に天皇の遷御といった八ヵ月の短期間で出来ている。一方、第十次造営では長和五年（一〇一六）四月七日の行事所始から寛仁二年（一〇一八）四月廿八日の天皇遷幸まで二年を要している。しかし、行事所始は木工事を始める木造始より前の段階であつて、木作始がいつ行われたのか明らかでなく実際の工程は分からないし、長和五年九月廿一日に一旦遷御を翌寛仁元年十一月一日と決めたものの、万人が造営のために苦しんでいるため寛仁元年十月十六日になって工事を延期した（『小右記』）という事情もあった。たび重なる内裏の造営は国民に大きな負担を強いることになり、第三次造営時の貞元二年（九七七）五月廿三日、第六次造営の長保二年（一〇〇〇）七月三日などの記録にみられるごとく、諸国に半租が免じられている（『日本紀略』）。木作始から立柱上棟までの期間は一ヵ月から四ヵ月でかなり差があるが、これらの日時は遷御も含めて陰陽寮が吉日を選んで決める（例えば第三次造営の天延四年（九七六）五月十四日のように）ことなので、当然ながら実際の工程とは多少の差がでてく

る。竣工した各建物には額が懸けられたが、第三次造営のように、遷御の二日前に未だ功終らずといえども吉日に依て也、として額が掛けられた例もある。

造営の規模については、造営のたびごとに内裏全部の建物が再建されたのか、時には焼け残った建物があつてそれらはそのまま再用されたのかは明らかでない。いずれにしても、一年か一年数カ月で何十棟という建物を完成させるのは大変な工事であつたと思われる。それを可能にしたのは、前述したように建物ごとに工事を諸国に担当させて競わせたことと、建物が檜皮葺で、おそらく組物がないなど簡略な形式になる住宅風のものであつたことによる。大極殿の方は規模がきわめて大きく、おそらく三手先組物・二軒繁垂木で屋根が瓦葺という寺院の主要仏堂並みの建築であるため、三年前後の工期を要したのであろう。

ところで、長保三年十一月十八日に焼亡したあとの第七次造営については、同月廿五日に建物の数を減らすか、高大な建物の寸法を減らすかということが協議され、さらに寺院の古い殿舎を使うことも検討された。おそらく、たび重なる造営に困惑して出費を抑えたいという意向によるものだろう。このことは簡単には決まらず、四カ月近く経った翌年三月十九日に、数は減らさないが高大にはしないことで決着をみ、杣入六月七日、木作始七月十九日、棟上明春と定められた。この日程は五月廿日になって早められ、六月九日に木作始、七月十九日に上棟が行われ、翌長保五年十月八日に天皇遷御となった。

また、長久三年（一〇四二）十二月八日焼亡後の第十二次造営はなかなか決まらなかったようで、天皇は官朝所へ移つたあと翌四年三月廿三日一乗院へ移り、同院が十二月一日焼失して高陽院から東三条院へ移り、寛徳二年（一〇四五）正月皇太子へ譲位後天皇が崩御、六月十三日新帝は京極院から官朝所へ、さらに十二月十六日官朝所へ移り、翌三年二月十八日官朝所が焼失して大膳職へ、四月四日には二条第へ移り、同年（永

承元年）十月八日やつと新造内裏へ遷御するという有様であつた（『百練抄』）。この内裏がいつ着工されたのかは明らかでない。二年後の永承三年十一月二日に焼亡した後も約一〇年間造営がなかったらしく、天皇は院御所を転々としてやつと新造内裏へ遷御して程なく、天喜六年（一〇五八）二月廿六日この新造内裏が大極殿と共に焼亡した。この後の再建も容易に決まらず、十一年後の治暦四年五月十一日に大極殿の造営が決まったが、内裏の方は翌五年（延久元年）も梁年（梁を上げ柱を立てることを忌む年、酉年）ということで造営が行われず、延久二年末か三年初め頃にやつと着工され、三年八月廿八日に天皇が遷御した。

永保二年（一〇八二）七月廿九日または内裏は中院と共に焼失したが、八月十七日当年は炎旱のため造営を停止することを決め、その後暫くそのままとした。寛治八年（一〇九四）十月三十日になって、「造伊勢太神宮之間、可有造内裏哉可」の議があり、結局造営しないこととなつたらしい。承徳元年（一〇九七）十二月廿日造営が定められ、同二年一月廿四日に事始、四月十日に棟上が行われた。十月三十日遷御の日時を明年二月と定めたが、女御懷妊によつて工事が暫く中止され、康和元年（一〇九九）四月十九日工事が再開された。そして、翌二年六月十九日に事始以来工事中断を含めて二年五カ月経つて天皇が遷御した。

③ 工匠の儀式

以上みてきたように、古代における寺院や平安宮大極殿・内裏の造営工事では、行事所始・事始・木作始（鉦始）・地鎮・築壇始・居礎始・立柱・上棟・心柱立・仏舎利納・破風立・葺始・露盤上・仏渡・額始・供養などの事項が工程に合わせて現われ、これらが工事の節目であり何らかの儀式を伴う場合が多かつたと思われる。このうち、事始は事務所開きともいふべき行事所始と木作始とを指す場合があるらしい。地鎮は

基礎工事を始める前に地の神を鎮めるものであり、仏舍利納は塔の場合に仏舍利を心礎などに納める儀式である。仏渡は仏堂などで仏像を安置すること、額始は各建物に題額を掛けることで主として大極殿・内裏の場合にみられ、いずれも竣工直前に行われている。供養は竣工を祝う落慶供養である。したがって、行事所始・地鎮・仏舍利納・仏渡・額始・供養は主として施主側の行事又は儀式といえ、工事の進捗に直接係わる事項は材木の加工に着手する木作始、基壇を築き始める築壇始、礎石の据付を始める居礎始、軸組の組立を始める時の立柱・上棟・心柱立、軸組の組立が終って破風を取り付ける破風立、野地を作って屋根を葺き始める葺始、塔の場合に屋根を葺き終って相輪を上げる露盤上である。その中でも、実際上の着工式となる木作始、軸組材の木作が終って柱を立てる立柱、棟木を上げる上棟、それに塔の心柱を立てる心柱立は工匠達にとって特に重要であり、工事の安全と成功を祈って儀式を行ったと考えられる。中・近世には木作始（鉦始）・立柱・上棟は番匠が行う最も重要な儀式とされ、長享三年（一四八九）に著された現存最古の木割書「三代卷」⁽⁸⁾にも記述があり、江戸時代の技術伝書には三規式として詳細に説かれている。⁽⁹⁾

以下、木作始・立柱・上棟及び心柱立について儀式の内容が知られる例をみることにしよう。

1 木作始

奈良時代以前では、さきにあげた法興寺・山田寺とも木作始は出てないし、ほかでも木作始の記録は見当たらないため、儀式が行われたのか、どのような内容であったのか、明らかでない。しかし、奈良時代の正倉院宝物に含まれる銀平脱龍船墨壺は、前部に龍頭を作り全体に黒漆を塗って銀平脱の手法により装飾文様を描いた豪華なものであり、実用ではなく儀式用のものとみられていて、このような墨壺を使って奈良時代にも木作始などの儀式が行われたことを示す資料といえよう。⁽¹⁰⁾

なお、木作始ではないが、山田寺でいう「始平地」は寺地造成又は築壇始にあたると思われる、正倉院文書の中の「造金堂所解案」⁽¹¹⁾に「六百七十文堂地築平衆人等中頓給料」とあることを考え合わせると、地鎮に類する儀式が行われたとみてよからう。

平安時代に入っても、木作始の内容を具体的に示す記録はあまり見当たらない。平安宮八省院応天門の造営に關し、『三代実録』貞觀十年（八六八）二月十三日の条に、「始造應天門、大板於會昌門前、乃下斤斧焉」とあってこれが鉦始（木作始）にあたるものと思われるが、詳しいことにはふれていない。

春日社西塔の造営では、天永三年（一一一二）八月七日に木作始・壇築始・礎居始が行われたが、その時の様子を『中右記』は次のように記している。「木作始、壇築始、礎居始皆申剋也、（中略）、大工重恒著衣冠作始、末工升人同作始了、次取淨所之土令運置御塔所、取運置御塔所先僧正進寄築始、以白木令築始也（中略）、次可居始礎一顆、宗國、仲光依為氏人、取入土中、於此辺也、是南京旧寺之跡石也。被仰下、大工重恒引率人夫百人許居始、自本下知院司、佐保殿令運置礎すなわち、大工が衣冠を着けて木作始を行ってから末工二〇人が木作始を行って終り、次に土を運び込んで僧正が白木（の鉄か）で築始を行い、次々と中納言はじめ施主側の関係者が築始を行って終り、次に大工が人夫百人許りを引率して礎居始を行ったが、礎石は奈良旧寺跡の石であったという。そのあと工匠達に禄が給され、饗された。木作始の詳しい内容は分からないが、大工や少数の小工だけでなく二〇人もの木工が行っている点が後世とは異なる。壇築始は現在の鉄入式に似ているようである。礎居始は人夫約一〇〇人を動員して一個の礎石を据えているので、おそらく大きな心礎なのであろう。なお、木作始は壇築始・礎居始より前に行われる例が多いようであるが、春日社ではこの塔の南大門の場合も同じ日に行われている。

また、長承三年（一一三四）八月廿一日に行われた鳥羽殿経蔵の事始

について、『長秋記』は「仍召修理所工安季、仰可始木造之由、家成安季着布衣、取鉞始之」と記されていて、行事の家成と大工の安季が布衣を着け戊（まさかり）を取って木作始を行ったことが分かる。しかし、林を隔てていたためと雨が妨げになってよく見えなかったという。

そのほか、儀式内容は明らかでないが、第二次大極殿における元慶元年（八七七）四月九日の「始構造大極殿」では「行事大夫已下飛驒工已上、木工助以下及大少工」が饗を受けているし、『平安遺文』所収の久安五年（一一四九）七月九日「紀伊国金剛峯寺大塔事始日記」には大工・引頭二人・列八人など工匠への禄物が記されていて、何らかの儀式が行われたものと思われる。

2 立柱・上棟

立柱・上棟についても、奈良時代以前では明らかにする記録は見当たらないが、前出の「造金堂所解案」に堂地築平給料に続いて「二貫文堂棟梁與散料」とあることから、棟上の儀式が行われたと考えられる。

平安時代も後期になると、儀式内容が知られる記録もいくつかみられる。康平元年（一一〇五）八月十月廿七日に行われた法成寺阿弥陀堂・薬師堂・五大堂の上棟立柱について『定家朝臣記』は「法成寺上棟立柱已刻阿弥堂末刻五大堂（中略）打鼓右近将監正助打之次又打上棟鼓了召大工已下下給禄有差」とごく簡略に記しているが、立柱と上棟が同時に行われたことが分かる。

治暦四年（一一〇六）十月十日に行われた第三次大極殿の立柱・上棟については『師記』にもう少し詳しく記されている。それによると、「打鼓依雅案寮不参使立柱等起座行事次給饗饌於工匠等大工三人次已刻上棟大工令鼓右近泰成重打之立柱等起座行事参屋上了次打鼓正助打之次召大工并長三四人給行事所禄史生取之次国司給禄於壇下給之大工装束一襲被鞍馬各一匹長等給馬給卅余疋之間」とあって、鼓を打って立柱が行われ（行事・弁史・国司達も加わる）、饗饌が工匠達に給され、次いで上棟が行われ（大工が幣を持ち弁史が瓶を供えて共に屋上へ行く）、鼓を打ち、大工と長に行事所の禄（絹）が給され、また国

司の禄（馬）が給されることが分かる。飯屋・装束の体は木作始日の如くであったというから、やはり木作始でも儀式が行われたと考えられる。上棟の際に屋上で幣を振り瓶を供えたとすれば、後世の上棟式とあまり変わらないことになる。立柱が同じ日に行われているから、大規模で構造も複雑な大極殿では実際に棟木を上げるところまではいかず、おそらく高い所に足代が組まれたのであろう。

承保三年（一一〇七）五月廿八日の陰陽寮による法勝寺阿弥陀堂の雑事日時定では、木作始・築壇・居礎・堅柱上梁棟を定めていて、築壇と居礎は六月廿八日、立柱と上梁棟は七月十一日とそれぞれ同じ日に時刻を違えて行うとし、立柱は先ず東、次いで西、北、南の順に行うとしている。

永久五年（一一一七）一月廿四日に行われた法成寺南大門再建時の立柱上棟についても『殿暦』の記事は簡略で、左近将監行高が鼓を打って立柱が行われ、又鼓を打って上棟が行われ、のち大工達に禄が給されたという。

勝光明院の造営については『長秋記』に工事の経過がかなり詳しく記録されていて、長承三年（一一三四）四月十九日に行われた立柱・上棟の儀式内容を知ることが出来る。当日は已刻に居礎が行われ、そのあと午刻に立柱上棟が行われたが、居礎については述べられていない。現場の様子は「御堂廻廊二樓御皆結麻柱、御堂中央間、自池上至棟木、以長木指堵柱、敷板構登階」とあって、中堂と左右の翼廊に足代を設け、中堂の中央に前面の池から棟木へ栈橋を架けたことが分かる。棟木は仮置きされたものであろう。午刻になると、立柱等の日時を定めた勘文を出して国司が開き、大工季貞に立柱の次第を伝えた。立柱次第は勘文に「先北、次南、次西、次東」とあるだけで儀式の状況は述べられていないが、東向きの中堂の北側面・南側面・西背面・東正面の順に側柱が立てられたのであろう。この間に右近将監が大鼓を打って四声をあげ、乱

声が発せられ、此間に上棟が行われた。内容については、「大工取幣、小工折敷、居士器入米、持棒相従、昇自階、依雨不至棟際、次小工以件幣結付中央棟木、吉秀折敷、件木応鼓声先渡畢、次以弓矢結付、南北妻畢」とある。すなわち、大工が幣を取り、小工が折敷いて土器に米を入れ、捧げ持って棧橋を上り（雨のため棟際までは行かない）、次に小工が幣を棟木中央に結び付け、吉秀が折敷いており、棟木を鼓声に応じて渡し終え、次に弓矢を棟木の南北両端に結び付けて終った。そのあと工匠達に禄物が給されたが、それは「大工季貞別禄二百疋二結、被物三重、装束一袋、馬二疋、一疋置鞍、次檜皮工鞍馬被物、壁工同、石作僧一被物、自余工等馬被物」であった。このように、棟に幣・弓矢を結び付けるなど中・近世の上棟と同じようなことが行われたのである¹²⁾。

久安三年（一一四七）十月十日に行われた延勝寺の豎柱上棟については、八月廿八日の日時定で「豎柱時辰二点、立柱次第先西、次東、次南、次北、上棟時午」としており、立柱上棟当日の詳しい記述はないものの予定どおり行われたのであろう。

以上の例ではいずれも立柱と上棟が同じ日に行われているが、これは儀式として形式的に行ったもので、実際の工程としては立柱と上棟を半日や一日でとても出来るものではない。寺院建築では柱を立てて頭貫でつなぎ、組物を置いて架構を組み、その上に桁や棟木を上げることになるからで、大極殿も同様である。表1・2によると、このほかにも立柱上棟を同じ日に行っている場合が多く、それらも儀式としての形式的なものと考えられる。

しかし、法成寺金堂の場合は治安元年（一一〇二）の六月廿七日に立柱、同年七月十五日に上棟を行っており、実際の工程に合ったものかと思われるが、儀式の内容に関する記載がないので明らかではない。また、上棟の記録だけがあって立柱が見当たらない場合も多いが、それらは立柱が別の日に行われたのか、あるいは同じ日に立柱も行われたのか、明

らかにしえない。ただし、承安二年（一一七二）二月三日に行われた最勝光院御堂の上棟については『玉葉』に「次打鼓、次上棟大工束帶自取庇柱昇屋上飯降了、次又打鼓、末之屋同上棟了」とあって立柱の記載はない。大工が庇柱に取り付いて屋上に昇るとあるので、そのまま解釈すれば柱・架構は組まれていたことになる。

ところで、立柱次第については、法勝寺阿弥陀堂が七月十一日（秋）で東・西・北・南、勝光明院が四月十九日（夏）で北・南・西・東、延勝寺が十月十日（冬）で西・東・南・北の順としている。これは立柱の順序を季節によって方位を決める後世のやり方と全く同じである¹³⁾。

3 塔の心柱立

塔において心柱は特別の意味をもつものであり、心柱立が工程上も重要な位置を占めると考えられる。奈良時代以前においても、乏しい記録のなかで法興寺・山田寺の造営に関し塔の心柱立が仏舍利奉安とあわせて出てくるし、ほかにも舒明六年（六三四）三月十五日「建豊浦寺塔心柱」（『扶桑略記』）などがあるが、その内容を示す記録は見当たらない。

平安時代になると、前記の立柱上棟と同じく儀式の内容を述べた記録がいくつか出てくる。

応徳三年（一一〇八）に再建された東寺五重塔について、同年八月十八日に行われた心柱立の様子を「東寺塔供養記」は次のように記している。「今日午刻被上東寺塔棟、（中略）、召左兵衛志多助忠令撃鼓、大工恒行是永以下率工先立同塔心柱、上達部以下並本寺長者定賢僧都以下、人夫相共引綱、工等散供如常、又給禄有差、大工置鞍馬一疋并装束一、具最上綱列工布」これによって、大工が雑工を率いて心柱を立てたこと、上達部と寺の長者以下が人夫と共に綱を引いたこと、これを上棟と称していることが知られる。この塔は二カ月後の十月廿日に供養されていて、同供養記にも「去八月十八日上棟、六十日内造畢」とある。しかし、この心柱立を一般的な心柱立（心礎上に立てる）とすると、二カ月で竣工することはあり得

ない。大規模な五重塔であるから心柱を三本継とみて、三本目の心柱を継ぎ立てた時のこととしてもあと二カ月では竣工に至らないと考えられる。理解に苦しむ記録である。

永久四年(一一一六)三月六日に供養された春日社の西塔については、『中右記』に工程が分かる記載があつて、「永久元年七月十日心柱立、同年三月四日心柱続立、同年七月廿九日心末柱続立」とある。儀式内容までは記していないが、二年七月廿九日の項には「続立心末柱兼引上麻柱之上」之後、給饗祿於工等、作塔之法、每立心柱、必給饗祿也 已及三ヶ度」とあつて、三度の心柱立ごとに工匠達に饗応があり祿物が給されたことが知られる。心柱立が三度行われたのは心柱が三本継であつたからで、三本目の末心柱が続き立てられた前日の項に「四重皆作了、第五重作始也」とあつて、心柱がどの高さで継がれたのか、およそのことが分かる。また、二本目の中心柱の続立では「去一日先依吉日立仮柱、今日令立替也」とあつて、三日前の吉日にとりあえず仮の心柱を立てておき、四日当日に取り替えたことが分かる。したがつて、中心柱・末心柱については工程に合わせて心柱立が行われたと考えてよい。なお、この塔は興福寺五重塔を模して造られたから、⁽¹⁴⁾初重柱間は約廿九尺で総高さが一五〇尺はあつたと考えられ、心柱が三本継であつたことは間違いない。

永久五年一月八日に焼失して再建された法成寺の東西両五重塔は元永元年(一一一八)十月二日に心柱立が行われたが、その時の様子を『中右記』は次のように述べている。「東西心柱網綱縫置綱(中略)行高打鐘、殿下取網、為隆取網進内府以下随召令曳網給、則立定心柱、是從本麻柱中寄立礎傍例他、則立定了、又令取西塔網給如初、北面則立定了、令帰着幄座給、又打大鼓乱声、上両塔棟了」。すなわち、東西両塔の心柱に絹綱が結ばれていて、左近將監行高が鐘を打つと藤原忠実が綱を取り、左中弁為隆が綱を取つて進み南面の東へ上り、忠通以下が綱を曳いて心柱を立て定めた。心柱は初めから足代内の心礎の傍に寄せて立ててあつ

た。東塔の心柱を立て終わると、また西塔の心柱の綱を東塔と同じように取り、こんどは北面の西上へ進み、綱を曳いて心柱を立て終えた。忠実以下が幄舎の座に帰つてから、また大鼓を打ち乱声を發して、両塔の棟上が終つた。このあと「左中弁為隆着行事幄、給工祿、大工重恒馬三疋、此中二疋置鞍、又東帶布衣水旱裝束」とあつて、例のごとく工匠達に祿が給されたことが分かる。その後、元永二年八月十六日には「御塔心柱続立、第二柱也」が行われた。このあと供養まで心柱続立の記録は見当たらず、心柱が二本継なのか三本継なのかは分からない。

このように、法成寺や東寺の五重塔では施主側の関係者が綱を曳いて心柱を立てており、この点は後世の棟上と同じである。⁽¹⁵⁾また、両者とも心柱立を上棟と称しているが、法成寺の場合は前後の工程記録からみて一本目の心柱立であることは明らかである。

待賢門院が再興した法金剛院では長承三年(一一三四)八月十三日に三重塔の心柱立、経藏・回廊の棟上が行われた。『長秋記』には「今度共造経藏西廻廊、塔経藏皆結麻柱、引度棟木、御塔立心借柱、壇未堅、仍礎只如在也、(中略)、大工東帶、取幣渡御車前進昇、階下末工召之昇上、此間右近將監多近方大鼓ヲ押マロハシテ持殊、進御車前、先乱声、次一兩度鼓、此間御塔立心柱、立張弓、又御経藏渡棟木、四面廊棟皆渡了、此後召工下給祿」とあつて、塔の心柱立と経藏・回廊の上棟が同時に行われたことが分かる。塔・経藏・回廊にはいずれも足代を結えてあり、柱は心借柱が立ててあつた。大工は東帶を付け、幣を取つて末工を召して足代上に昇る。先ず乱声が發せられ、次に大鼓が打たれ、その間に塔の心柱が立てられて張弓が立てられ、経藏と回廊の棟が皆渡し終えられた。経藏・回廊は立柱について述べられていないので、上棟は足代に渡された形式的なものだったのだろう。この塔の場合も勝光明院御堂と同じように弓が立てられたが、棟木がないのでどこに立てられたのかは分からない。

④ 工期と工程

おしまいに、以上みてきた造営工事のうち工期と工程がほぼ明らかなるものを付図に示してみた。

寺院の造営で、途中とくに支障もなく工事が進み、ある程度まとまった伽藍が完成したとみられる例では、木作始から供養まで法勝寺・円勝寺・延勝寺が二年半余り、尊勝寺がほぼ二年、勝光明院も木作始の期日がはっきりしないが、二年数カ月月の工期と思われる。ただし、法勝寺ではその後九重塔の工事が行われている。平安時代後期の御願寺などでは、これ位が標準的な工期であったのだろう。工期の短い例としては、最勝寺が木作始から十カ月で供養されたが、塔が木作始の前に建てられているので、その工事中に全体の準備が進められていたことも考えられよう。

平安京の大極殿については、木作始から完成まで第一次が二年六カ月、第二次が三年八カ月であるが、第一次は事始から木作始までの期間を加えると三年四カ月となり、第三次の場合に近くなる。内裏については、木作始または事始から天皇遷御まで最も短いのが第四次の八カ月、長いものが一年四〜五カ月で、一年前後が平均的な工期であったらしい。このように、建物数の多い内裏がほぼ一年前後の工期で竣工するのは、天皇の住居であるために工事を急いだことのほか、建物の構造形式が寺院や大極殿に比べて簡略であることに起因すると考えられる。

工事期間のうち、木作始から建物の組立にかかる立柱上棟までの位かかったのかをみると、かなりまちまちで、寺院の場合は円勝寺一年二カ月、延勝寺一年三カ月、尊勝寺一年余り、最勝寺が五カ月で、いずれも全工程の半ば少し前に立柱上棟が行われている。しかし、法勝寺の場合は木作始のわずか一カ月後に立柱上棟が行われていて、いささか早過

ぎる。立柱上棟は、軸組材の木造りが終って実際に軸組の組立を始める時に行うのが工程上のものであるが、これを陰陽道による吉凶の関係その他で形式的に早い時期に行うこともあると思われる。また、伽藍造営の場合は金堂等何棟かの主要建物について合わせて行うのが一般的であるが、法勝寺の場合は承保二年七月十一日の木作始と八月十三日の立柱上棟は金堂だけであったようで、阿弥陀堂が一年近く経った翌年六月十三日に木作始があり、やはり一カ月後の七月十一日に立柱上棟されている。

大極殿は第二次と第三次では工程が大きく違う。第二次では始構造を木作始、始堅柱を立柱上棟とみるとその間は丁度一年となるが、第三次では木作始から二カ月で立柱上棟を行い、その六カ月後に屋根を葺き始めていて、ここまではきわめて早い工程である。しかし、そのあとが竣工まで三年かかっており、長すぎる。立柱上棟・葺始が形式的な儀式であったのか、あるいは屋根葺にかかってから工事を中断するような事態が起こったのか、明らかでない。内裏についてはこれまたまちまちであるが、工期が一年前後の場合で木作始または事始から立柱上棟まで二カ月から四カ月という場合が多いようである。しかし、第四次では工期八カ月のうち立柱上棟まで四カ月以上、第十四次では工期一年五カ月のうち一年余りを要している。反対に、第七次では工期一年四カ月のうち一カ月余り、第八次では工期十カ月のうち一カ月で遷御に至っている。ただし、第七次は建物の数を減らすか、規模を小さくするかなどを議論していて、その間に準備が多少進んだのかもしれない。

次に、個別の建物についてみると、木作始から供養まで最も短いのは無量寿院阿弥陀堂と延暦寺横川中堂の八カ月、醍醐寺薬師堂の八カ月半である。醍醐寺薬師堂は三間四面の中規模の堂であるが、無量寿院は十一間堂、横川中堂は四面懸造の孫庇付七間堂でいずれも大規模な堂であるから、いかに工期を急いだかが分かる。

無量光院は病気の道長が極楽往生を願って権力濫用ともいえる方法で
きわめて多数の工匠を集めて工事を急がせたものであり、横川中堂は延
暦寺が一山をあげて再建工事に取り組んだことで可能であったのだろう
と思われる。法成寺で無量光院に続いて着工された十齋堂と三昧堂は約
九カ月で竣工しており、これもかなり短期間である。また、永久五年（一
一七）に焼失した法成寺の東西両塔・南大門・惣社の再建工事では同
時に事始があつてから惣社が六カ月、南大門が十カ月余りで竣工した。
白川泉殿（蓮華蔵院）の新阿弥陀堂は壇築始から供養まで八カ月である
から、木作始が壇築始の前に行われたとしても全体で十カ月前後であろ
う。白川阿弥陀堂内の九体阿弥陀堂と三重塔は同時に木作始があつてか
ら約十一カ月後に前後して供養されているが、三重塔の工期が十一カ月
というのは最も短い例と思われ、本当にこれだけの工期で竣工したのか
疑問が無いわけではない。

立柱上棟の時期については、木作始から無量寿院が六カ月、横川中堂
は一カ月弱、醍醐寺薬師堂が三カ月弱、白川泉殿の新阿弥陀堂は壇築始
から四カ月、白川阿弥陀堂内九体堂・三重塔は約七カ月とこれまたかな
りまちまちである。無量光院と白川阿弥陀堂内九体堂・三重塔は全工期
の七割前後を経過した時点であるから、実際の工程の上棟とみてよか
ろう。

むすびにかえて

以上、古代の造営工事における工程・工期、工匠の儀式について文献
史料による事例をみてきた。それらの内容が詳しく分かる例は少なく、
とくに奈良時代についてはほとんど分からないが、とりあえず要点をあ
げておく。

1 儀式としては、古代でも木作始・立柱・上棟と塔の場合の心柱立が

重要視された。立柱と上棟は、実際の工程には関わりなく同じ日に行
われた例が多い。

2 儀式の内容については、木作始はほとんど分からないが、立柱では
立てる順序が季節によって異なること、上棟では棟に幣や弓矢が飾ら
れること、心柱立では綱を付けて施主達も引くことなど、中世・近世
と同じような行事の行われた例がある。

3 工期については、御願寺等では伽藍中枢部を建てるのに二年から二
年半位が標準的な工期、平安宮の内裏では一年前後が平均的な工期で
あったらしい。

4 工期の中で立柱・上棟が行われた時期についてはかなりまちまちで、
やはり立柱・上棟が実際の工程とは別に行われたらしいことがうかが
える。

註

(1) 「法成寺金堂供養記」には「元年六月廿七日辛未卯刻、両堂堅柱上棟」とある
が、日記である「左経記」の方をとる。

(2) 立柱については「小右記目録」では塔・丈六堂（釈迦堂）・十齋堂としているが、
十齋堂は寛仁四年にすでに供養されており、十三間堂の誤りと考えられる。

(3) 長元二年七月廿日の心柱立は前後の工程記録からみて、おそらく三本継の心柱
（五重塔の心柱は三本継とする例が多い）の三本目の続立ではないかと思われる。
『少右記目録』によると、この心柱は八月八日に顛倒しており、そのあと供養ま
で二年二カ月余しかない。

(4) 六勝寺の位置等については、福山敏男「六勝寺の位置」『日本建築史研究』所
収 参照。

(5) 高さについては「院家雑々跡文」(暦応三年二月)、『大日本史料』所収に廿七
丈とある。

(6) 勝光明院の造営過程については、角田文次「鳥羽勝光明院について」(『建築史』
六一・一二三)に詳しい。

(7) 以後の焼亡回数から推察すると、一六七年間一度も内裏が焼亡しなかったとは
考え難い。記録に残されていないだけのことではないか。

(8) 原本は現存しないが、法隆寺大工平政隆が天和三年（一六八三）に著した木割

書『愚子見記』に収録されている。

(9) 例えば、加賀藩御大工山上家の伝書「三規式書」二巻はその好例である。国立歴史民族博物館企画展示図録『失われゆく番匠の道具と儀式』（一九九六年）参照。

(10) 同前『失われゆく番匠の道具と儀式』参照。

(11) 『天日本史料』所収。福山敏男氏はこれを法華寺金堂の造営史料とされている。

〔奈良時代における法華寺の造営〕（『日本建築史の研究』所収）

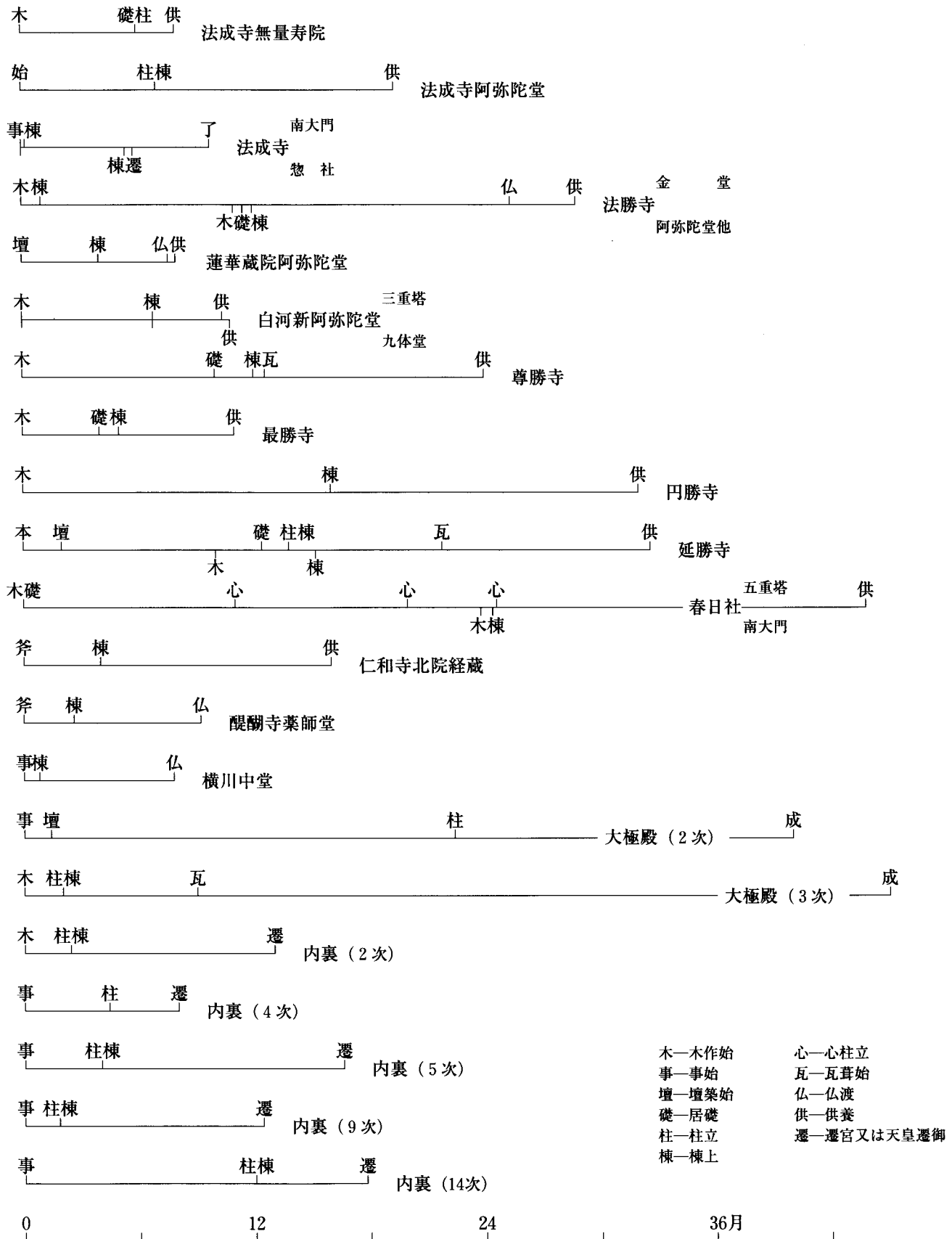
(12) 例えば、絵画資料では「真如堂縁起」（大永四年（一五二四））に上棟式の場面があつて、棟に弓矢を立て、瓶子等を供え、槌を打っている。文献史料では、春日大社の「当社御造替日記下巻」（応永十四年（一四〇七））などに上棟式の様子が詳述されている。

(13) 鎌倉時代に成立した小百科事典『拾芥抄』や江戸時代の大工技術書『匠家故実録』（享和三年（一八〇三）正月）では立柱の順序として、春―南・北・東・西、夏―北・南・西・東、秋―東・西・北・南、冬―西・東・南・北としている。

(14) 『中右記』天永三年六月十七日の項に「次開御塔廻見、是以此御寺塔可被奉模之故也」とあり、興福寺大工是助等に五重塔の柱間寸法を計らせている。さらに、七月一日は大工重恒を奈良へ遣し、興福寺五重塔の寸法を検注させている。

(15) 例えば、塔ではないが棟木に綱を付けて引く上棟の有様は、中世の絵巻「長谷寺縁起」（南北朝時代）に描かれている。『失われてゆく番匠の道具と儀式』参照。

（国立歴史民俗博物館情報資料研究部）



付図 工期と工程

Process and Rituals in the Architectural Construction in Ancient Japan

HAMASHIMA, Masaji

Japanese architecture is characterized by a wooden construction with an axial structure. The building process includes a cutting down of appropriate trees in forests, lumbering, manufacturing of various parts (*Kizukuri*), and a construction of the platform by laying stones. It is then followed by setting up the framework with columns and beams, roofing tiles, attaching parts, paving walls, painting, and nailing various metal fittings.

How were the above processes carried out in the ancient times? How long did it take to complete them? What kind of rituals were held in the course of construction? What were the details of *Kizukuri-hajime*, *Hashira-tate* and *Mune-age* (rituals of *Takumi-ancient* Japanese architects), in particular? Did they differ in ancient times from those of the Medieval period and thereafter? To answer these questions, the author discusses the construction of the Buddhist temples and the court palaces in ancient Japan based on the archival records. The results of the survey can be summarized as follows :

- 1) Regarding the construction term, it took two to two and half years to build a Buddhist temple, whereas approximately one year was required to complete a palace.
- 2) The rituals during the course of construction, such as *Hashira-tate* and *Mune-age*, were held once on an auspicious day. These ceremonies did not necessarily correspond to the actual construction processes.
- 3) The details of *Hashira-tate* and *Mune-age* in the ancient times cannot be precisely reconstructed. However, in some case, they might have been similar to those in the Medieval era and thereafter.